

原発 被曝日記

森江信

社文庫
講談
森

げんぱつ ひばくにつ き
原発被曝日記

もり え しん
森江 信

© Shin Morie 1989



講談社文庫

定価380円

1989年1月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容
についてのお問い合わせは文庫第二出版部あてにお願
いいたします。(庫二)

ISBN4-06-184373-7 (0)

講談社文庫

原発被曝日記

森江 信

講談社

目次

第一章 汚染原発での研修	7
--------------------	---

第二章 “立派に被曝した”といわれて	91
--------------------------	----

第三章 内部被曝を追う	171
-------------------	-----

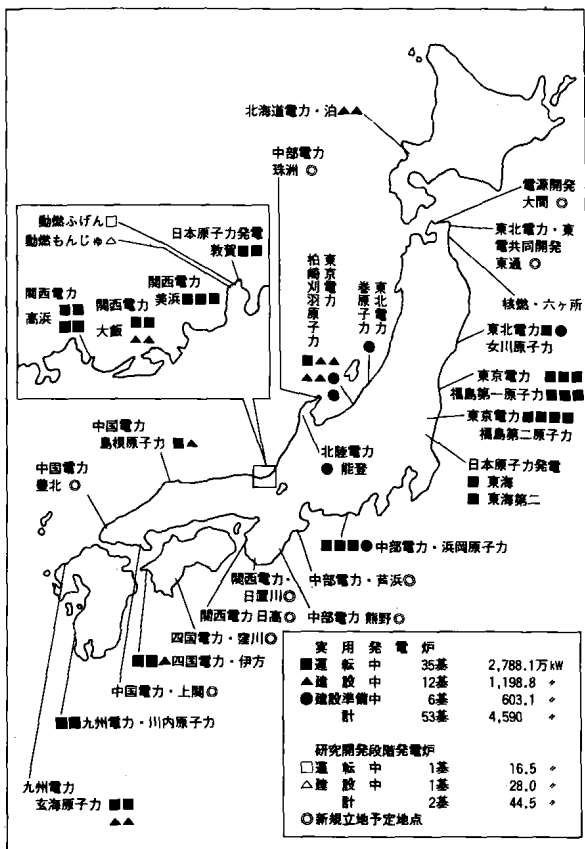
あとがき——原発労働者に墓碑銘はない	216
文庫版へのあとがき	221

解説 樋口健二	226
---------------	-----

本文庫は、『原子炉被曝日記』（技術と人間
一九七九年刊行）を改稿、改題したものです

原発被曝日記

日本の原子力発電の現状



第一章 汚染原発での研修

不安な出発

一九七六年四月四日（日） 一三時発「もりおか二号」は、株式会社ビル代行原子力本部の新入社員十数名を乗せて上野駅を出発した。目的地は常磐線の双葉駅。そこにある寮を宿泊地として、福島原子力発電所（原発、以下同じ）内での研修が始まったのだ。

ビル代行は戦後発足したビルメンテナンス会社で、高度経済成長期のビルラッシュのなかで大手企業ビルの管理を主体にして着実に成長してきた。一般ビルを対象とする管理本部と、原子力施設を対象とする原子力本部とにわかれ、日勤、パート等を含めた総在籍人数は二千数百名、うち原子力関係は約六〇〇名である。東海村にある日本原子力研究所のビル管理をしていたのをきっかけに、一九五七年に原子力分野へ進出している。原子力本部は東京銀座に本部を置き、福島原発、敦賀原発、島根原発、伊方原発、玄海原発、東海村、大阪に事業所を置いている。

四月一日の入社式から三日まで、新入社員は東京銀座にある本社で過ごした。一七名のうち一三名が大卒で、三名を除けば会社経験は初めてのいわゆる新卒者である。社長の型どおりの挨拶の後、会社内容や就業規則の説明がされた。

「初任給は大卒二二歳で八万五〇〇〇円です。いいですね」

会社の担当者の話に、手取りのことを言っているのかと思った。一〇万円台の初任給が噂されていた年であり、まして放射線作業ではないか（日経連の「初任給調査」によると、一九七六年

の男子初任給は、全産業平均で大卒男子九万八〇九六円、高卒八万一一八〇円である。しかし、それが初任給総額だった。うかつなことに私は給料のことはよく聞かずに入社してしまったのだが、他の新入社員もそうだったらしく、予想外の安さにあわてて質問が飛んだ。基本給五万三五〇〇円、生計手当一万五〇〇〇円、調整手当一万六五〇〇円。放射線作業に伴う手当は別ない。

新入社員のひとりが「危険手当はないのですか」と質問した。放射線作業が多いという話だったので、誰もが聞いておきたいことだった。担当者はやっぱり出たかという顔をして「当社では放射線作業は危険作業とは考えておりません。危険でないものに危険手当というのも変な話で、むしろ安全手当というべきでしょうね」などと訳のわからない説明をした。

「放射線障害が出たときには、何か補償があるのですか」

「国の基準を守っていれば障害など出るわけではないんですけどね。万一の場合を考えて、社員には六〇万円の生命保険をかけています」

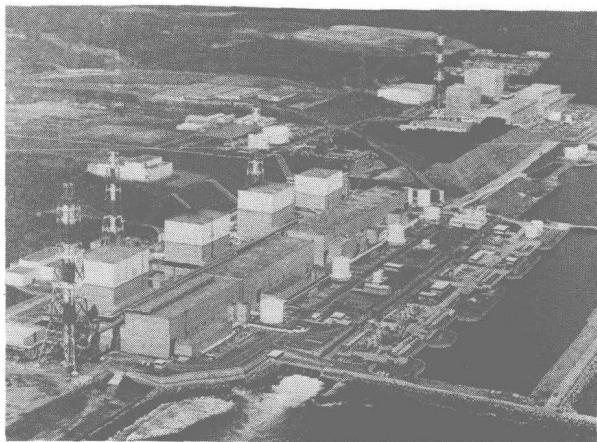
担当者の説明はよどみがない。しかし、どの新入社員も合点がいかない顔をしている。不安は残るがいまさら会社をかわるわけにもいかない。その夜、はじめて一緒にビールを飲んだ新入社員たちは、どうやらかなりの見込み違いをしてしまったという点で意見が一致した。

こんなわけで、新入社員は期待より不安の多い気持ちで福島に向かった。約四時間で列車は双葉駅に着いた。日本最大の原発密集地帯の入口駅としては、かなり貧弱な木造平屋の小さな駅

で、駅前広場も閑散としている。駅から五、六分歩くと、モルタル二階建ての真新しい寮舎が田んぼに囲まれて建っていた。

福島第一日目の夕食はカレー。日曜の夜はいつもカレーだそう。寮生はこれまで一三名だったが、新入社員一六名が加わって大入満員となり、六畳間に二名ずつの振り分けとなった。私は同じ新入社員の坂井さんと同室になった。茨城大学の化学出身で、寡黙な人だ。太卒一三名の出身校はかなり多様で、近畿大学原子力、東海大学海洋工学、日本大学物理、東京理科大学電気、茨城大学化学、東北大学原子核工学など、通常のビル管理会社とするならば異色の採用である。実は、この会社でこれほどの数の大卒者を一度に採ったのは初めてのことだった。不況で採用を控える企業が多いなかで、この会社はいくらでも人が欲しいという。新聞広告、大学への求人、知人の紹介等をはじめ様々の手段で求人をするが、毎年余分に採用しても実際に四月に顔を出すのは少なく、会社でもせいぜい四人くらいだろうと見込んでいた。それが意外にもたくさん採用できた。そこで、実際の原子力発電所内での作業研修という初めての試みをする気になったのだ。

給料も聞かずに入社したという新入社員側にも事情がある。大卒者のほとんどが留年経験者なのだ。六〇年代後半の「学園闘争」の主役たちの就職時期はまだ社会も好況だったが、その後の弛緩期に入学し、うかうか社会に出そびれているうちに世の中は不況になってしまった。とにかく社会にもぐり込んでいこうとする者たちがみつけたのが、「原子力」の看板をもつこの会社だっ



福島原発

たのである。

初出勤

四月五日（月） 事務所に初出勤。通勤には会社のバスを使う。寮から五分ほど歩いた所にある国道六号線沿いのガソリンスタンドが寮生のバス乗り場である。寮生はほとんど自分の車で行くので、ここから乗るのは他の営業所からの出張者と新入社員が多い。出張者は忙しい営業所の作業を手伝うためにまわされてきた者で、「応援者」とも呼ばれている。原発では通常運転時と定期点検時とで必要な作業員数がまるっきり違うので、営業所間で人員調整をしているのだ。通勤バスは補助イスを出してやっと全員が坐れるほどの混みようだった。若い寮生を除くと、あとは中高年の年配者ばかりである。バスは原発へ行

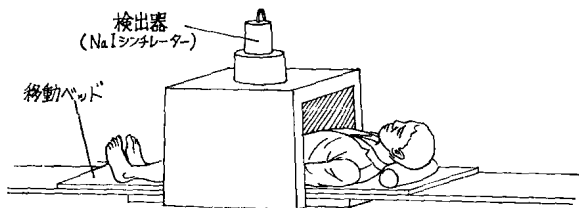
く車の列に入り、のろのろと進んだ。後にも前にも原発労働者を乗せた車が続けている。およそ二〇分で原発の入口まできた。守衛所では入門手続をする車が何台も止まっていたが、われわれのバスは運転手が片手を上げただけで通過した。敷地内には原発関連業者の事務所が並んでおり、ビル代行福島営業所は舗装道路からはずれた奥にあった。プレハブの事務所と倉庫のような木造の詰所がそれだ。仮事務所といった風情である。

薄暗い詰所では、地元出身と思われる年配の労働者が数十名、始業前の一服をしていた。みんな鼻にかかったような東北弁で話している。やがて詰所前の広場で朝礼が行なわれ、百数十名の労働者の前で新入社員がひとりひとり紹介された。いよいよ私も原発労働者への仲間入りである。朝礼の後、労働者はバスに乗って原発内の現場に散っていった。

放射線作業従事者としての登録手続が完了するまで、新入社員は事務所で数日間の教育を受けることになった。午前中は双葉町のH医院で身体検査を行なった。放射線を浴び続けると、眼には白内障、皮膚には紅斑が発生するのがわかっており、放射線作業の従事者は、法律で眼・皮膚の検査を三カ月に一度、血液の検査を六カ月に一度受ける。血液は血色素量と白血球数などを調べる。

「H先生に症状が見つかったらもう終わりだろうな。この間なんか、黒いサングラスをしたままだったのに、取らせもしないで眼の検査をするんだもん」

定期検診で一緒に来ていた作業員がこんなことを言って笑わせた。原発労働者の定期検診で原発周辺の開業医は忙しい。



ホールボディカウンター

身体検査の後には再び原発に戻り、体内放射能の測定を受けた。マイクロバスに乗って東京電力の事務本館の三階にある測定室に行った。そこにはホールボディカウンター（全身放射能検出器）があり、被験者はパンツ一枚のうえに白衣をはおり移動式ベッドに横たわる。検出器の放射線検出部はトンネルのような部分の上にあり、被験者はベッドに寝たまトンネルのなかに入れられ、測定をされる。体内放射能の測定は三カ月に一度行なわれる。放射能で汚染された場所での作業中に放射能を吸ったかどうかを検査するのである。

今回の測定は入域時測定と呼ばれ、作業前の体内放射能量を記録するためのものだ。われわれの体内にも自然の放射能があるので、あらかじめ放射能量を調べる必要がある。測定時間は四分間で、結果はカウント数で示される。待合室の掲示板には、普通の人で三三三〇カウントから三五八〇カウントで、三八〇〇カウントの場合は一生涯の積算被曝線量は約六ミリレムになる、ということが書かれてあった。体に入った放射能による被曝を内部被曝と呼び、長い間じわじわと被曝が続くので一

生涯の被曝線量の合計で表わすのである。外部被曝という言葉もあるが、これは体外の放射能からの放射線による被曝のことをいう。三八〇〇カウントが、放射能の体内摂取の有無を判断する基準だという。私は三三〇一カウントだった。

午後から教育を受けた。放射線従事者は教育が義務づけられており、本社では一般的なスライドを見せられたが、ここでは実際の管理方式の話が主だった。社内の被曝管理基準は年間三レム（三〇〇〇ミリレム）で、他に電力会社の基準である週三〇〇ミリレム、一日一〇〇ミリレムも守らなければならない。国の基準は三カ月に三レムで、これに従うと年間一二レムの被曝が許されるが、一般的には国際放射線防護委員会（ICRP）勧告の年間五レムが基準になっている。ビル代行の基準はこれよりは低い。しかし、東芝やその下請けでは年間一・五レムだそうだ。仕事内容も違うのだろうが、どこの会社に入るかによって被曝量も違ってくると思うと、初めから就職差別をされたようで感じはよくない。

個人の被曝線量の測定器にはフィルムバッチ（FB）、ポケット線量計（PD）、熱蛍光線量計（TLD）およびアラームメーターがある。いずれも胸に着ける小型の線量計で、このうち少なくとも二つを着けるということだった。フィルムバッチは一カ月に一度現像して線量評価をする。ポケット線量計は毎日自分で読みとって入域カードに記入する。ポケット線量計の目盛（通常は二〇〇ミリレム）以上に被曝したときは、TLDを緊急に読みとる。アラームメーターとは設定した線量まで被曝量が達すると警告音を出して知らせるものだ。それぞれに役割があるのだ。

が、公式の被曝記録にはフィルムバッチの線量が記録されるということだった。その他、防護具の話、管理区域（法律では一週間につき三〇ミリレムをこえるおそれのある区域とされている）内の放射線管理方法、汚染したときの処置などの説明もうけた。

夜、寮で新入社員の歓迎会が開かれ、本社からも何人かきていた。寮生がそれぞれ自己紹介をした。寮生はみんな若い。福島営業所ができてから五、六年しかたっていないので、高校を出てすぐ勤め始めた人もまだ二、三歳にしかなくていい。今年の新入社員は大卒が多く、しかも人一倍長くかけて卒業した人も多いので、かえって新入社員の方が年上になってしまう。

よろず雑用係

四月六日（火）交通安全大会。東電（東京電力、以下同じ）保安課の職員と警察官を退職してから入社したという人が演説をした。東電、会社の信用のためにも地元の信頼を失うような行為はするなという話だ。東電に通勤する車で朝夕はちよつとしたラッシュになっていて。原発建設に批判が多い昨今、地元とのトラブルはできるだけ避けたいのだろう。

昨日の教育の続きで、各事業部門の説明をうけた。ビル代行はもともと「ビル管理会社」、ひらくいえば「そうじ会社」である。原発内の作業もそれに近い内容である。福島営業所の業務は大きく四つにわかれており、工事部門、保安助勢部門、ランドリー（洗濯）部門、および清掃・発電助勢部門となっている。話を聞いただけではよくわからないが、要するに原発内で日常